

2000万署名で戦争法廃止へ

私の一言

唐突ですが、自民党の憲法改正草案についてご存知でしょうか。そういう私が実は詳しく知らないのですが、引かかる箇所がありました。それは、第24条に新設された「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位として、尊重される。家族は、互いに助けあわなければならない」という文言です。そもそも両性の本質的平等を表記していたし、そんなこと、国に言われなくても助け合いますよね？上から互助義務を押し付けるような違和感を覚えたのは下種の勘繰りでしょうか。私がいちばん大事だと思っている第13条の「個人の尊重」の個人は「人」になり、公益及び公の秩序に反しないかぎり」と制限がかかっています。

勉強不足を棚にあげてですが、権利と義務のはきちがえ、小さな政府と新自由主義と全体主義の傾向を感じ、自民党の政策が何をめざして行われていくのか、国民をどう縛り、監視していこうとしているのか不気味です。更に言うなら、これをスタンダードにしていきたいのでしょうか。これが正しいというか、「普通」だと思っているのでしょうか。私は「普通」という巨大な圧力はとても怖いですし、「普通」という言葉に画一化の匂いを覚えます。自分（達）は正しいのだという価値判断に乗っかっているような、そして今の日本は総体的に許容範囲が狭くなってきている気がしますし、それは格差社会と連動しているように思えます。

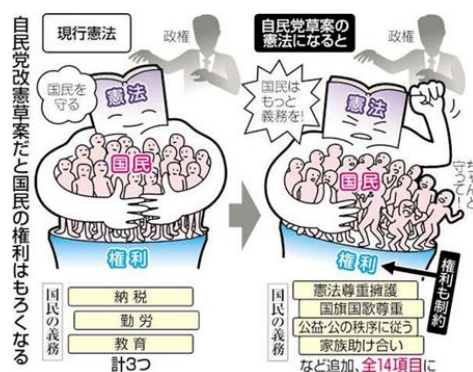
一方で、昨今ダイバーシティという考え方が外資系のグローバル企業から始まり、日本の大企業も

追随しメディアでも大きく取り上げられている現状もあります。私は、多様性と個性を大切にすることは肯定ですが、この流れには競争力強化の企業貢献と生産性優先の側面があることが否めないと思っています。

ぐだぐだと言ってきましたが、この草案は立憲主義、個人の尊厳、公共の福祉といった自由な生活を支える概念が大きく変容しており、これはやがて戦争へと続いていくのではないかと思うのです。

私はこれからも世情に対して、誰が言った、彼が言ったとかではなく自分の頭で考え続けること、何が正しいかまちがいか決めつけしないで、想像力を失わずに小さなノイズにも敏感でありたいと思います。これは常に葛藤したり煩悶したりすることの多い自分に言い聞かせていることであり、同じ言葉を共有できる仲間（集団）がいることが鍵だと思っています。

(老人介護支援センターほのぼの 西村哲也)



中学生の時、長崎の原爆資料館を見学し目を覆いたくなるような現実に、二度と戦争を繰り返してはならないと思いました。そして世の中の誰もが戦争に反対しており、ヒトとヒトが殺しあう戦争がおこるはずがないと漠然とですが思っていました。

しかし、私が看護学生の頃、イラク戦争がはじまりました。21世紀になってヒトとヒトが殺しあう戦争が始まったという事実には愕然としました。なぜ戦争が始まるのか、なぜヒトが殺されるのか、私に何かできることはあるのかと自問自答しました。

先日、医系学生の集いで東京大空襲を経験した方のお話を聞く機会がありました。その方が現在の日本の状況を「この道はいつか来た道・・・」と表現しており、第二次世界大戦前夜の雰囲気と似ていると言っていました。私たちの知らない間に、「特別秘密保護法」や「安保法制」など戦争ができる国になろうとしているのだと感じました。

戦争を反対する集会やデモ、署名活動を行う中で、世の中何も変わらないと無力感を感じることもあります。それでも反対し続けなければ日本が戦争する国になってしまうのだとも思います。一人でも多くの仲間とともに戦争反対の声を上げていきたいと思っています。「私たちは微力ではあるが無力ではない」という言葉を胸にこれからも戦争に反対し続けます。

(高松平和病院 3病棟 横田未緒)



3/29、国会前で、戦争法の施行に反対の声を上げるシールズのメンバー